

上ノ段町遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 二〇〇三 二

上ノ段町遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

上ノ段町遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび公共下水道敷設工事に伴います上ノ段町遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気付きのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

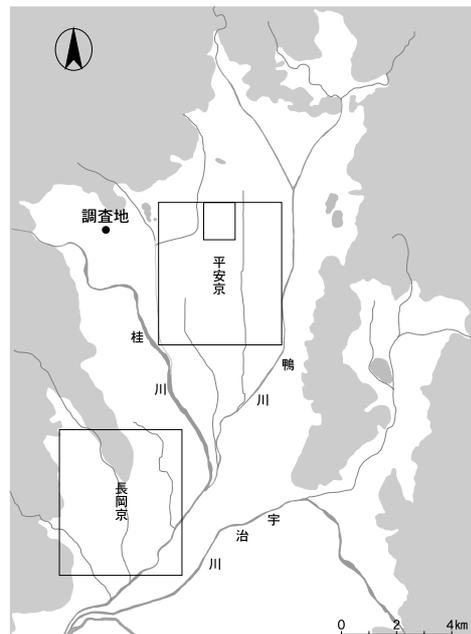
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成15年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|------------|---|
| 1 遺 跡 名 | 上ノ段町遺跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市右京区嵯峨野開町 市立蜂ヶ岡中学校内 |
| 3 委託者及び承諾者 | 京都市下水道事業管理者 吉村憲次 |
| 4 調査期間 | 1期調査：2002年12月13日～2003年3月31日
2期調査：2003年4月1日～2003年7月7日 |
| 5 調査面積 | 1期調査：600m ² 、2期調査：600m ² |
| 6 調査担当職員 | 津々池惣一・東 洋一・太田吉男 |
| 7 使用地図 | 図2は京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」「太秦」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した） |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 挿図の順に通し番号を付した。ただし釘のみ別に通し番号を付した。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子・調査担当職員 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 17 作成担当職員 | 津々池惣一・太田吉男 |



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 立地と環境	2
3 . 遺 構	3
(1) 1 区	3
(2) 2 区	4
(3) 3 区	6
(4) 4 区	7
4 . 遺 物	8
(1) 1 区	8
(2) 2 区	9
(3) 3 区	12
(4) 4 区	12
5 . ま と め	13
(1) 調査地土地利用について	13
(2) 木棺墓について	13
(3) 縄文土器について	14

図 版 目 次

図版 1	遺構	調査区配置図 (1 : 400)
図版 2	遺構	1 区第 1 面遺構実測図 (1 : 200)
図版 3	遺構	1 区第 2 面遺構実測図 (1 : 200)
図版 4	遺構	2 区第 1 面遺構実測図 (1 : 200)
図版 5	遺構	2 区第 2 面遺構実測図 (1 : 200)
図版 6	遺構	3 区第 1 面遺構実測図 (1 : 200)
図版 7	遺構	3 区第 2 面遺構実測図 (1 : 200)
図版 8	遺構	4 区第 1 ・ 2 面遺構実測図 (1 : 200)
図版 9	遺構	2 区木棺墓54実測図 (1 : 25)
図版 10	遺構	1 1 区第 2 面全景 (北西から)
		2 2 区第 2 面全景 (北東から)

図版11	遺構	1	3区第2面全景（南東から）
		2	4区第2面全景（北西から）
図版12	遺構	2	2区木棺墓54（南西から）
図版13	遺構	1	2区木棺墓54検出状況（北東から）
		2	2区木棺墓54遺物出土状況（南西から）
図版14	遺物	1	2区木棺墓54上部出土鉄釘
		2	2区木棺墓54下部出土鉄釘
図版15	遺物	2	2区木棺墓54出土遺物、3区出土石器
図版16	遺物	1	3区出土縄文土器（外面）
		2	同上（内面）

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：25,000）	1
図2	調査区配置図（1：5,000）	2
図3	調査前全景（東から）	3
図4	調査風景（北から）	3
図5	2区木棺墓54木棺模式図（1：20）	6
図6	1区溝64出土石印実測図（1：1）	8
図7	1区溝64出土石印	8
図8	2区木棺墓54出土遺物実測図（1：4）	9
図9	2区木棺墓54出土鉄釘実測図（1：4）	10
図10	3区出土縄文土器拓影・実測図（1：2）	11
図11	3区出土石器実測図（1：2）	12
図12	4区落込23・溝22出土遺物実測図（1：4）	13

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	8

上ノ段町遺跡

1. 調査経過

調査に至る経緯 本調査は、京都市下水道局による蜂ヶ岡中学校グラウンド西端部での嵯峨野調整池築造公共下水道工事に伴うものである。

当地域は、古墳時代から平安時代の集落跡である上ノ段町遺跡に該当する。これまでに蜂ヶ岡中学校内では3回の発掘調査¹⁾が行われ、古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物、平安時代の建物などの遺構が検出されている。遺物では、古墳時代や平安時代の土器のほか、縄文時代の土器や石器も出土している。また、周辺での立会調査²⁾でも上ノ段町遺跡に関連する遺構・遺物が検出されている。今回の調査でも、これまでの調査と同様の成果が想定された。

調査経過 調査対象地は約1,300㎡あり、対象地を4地区に分けて調査を実施した。1区は2002年12月16日より調査を開始し、2003年1月20日に埋め戻しを行った。2区は1月20日から

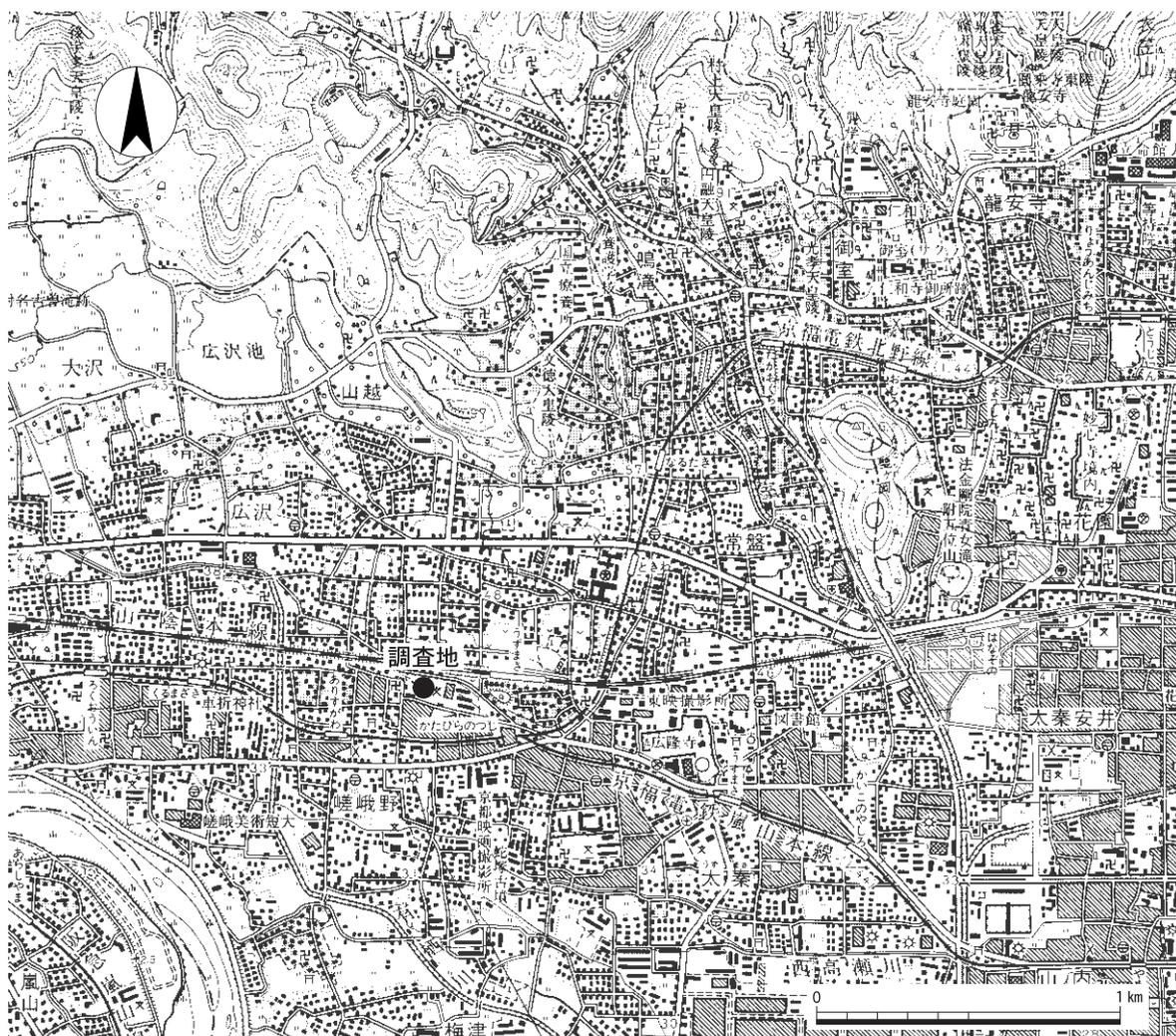


図1 調査位置図(1:25,000)

開始し、2月28日に終了した。3区は3月4日より開始し、4月22日に埋め戻しを行い、終了した。4区は4月22日より調査を開始し、6月25日に調査を終了し、その後埋め戻しなどを行い、7月7日に全てを終了した。

2. 立地と環境

調査地は、平安京の北西方向に位置する。この地域北方に展開する山地は、古生代に堆積した泥岩・砂岩・チャートから構成される丹波山地の末端部である。そこから南側には洪積層が段丘や扇状地を形成し広がっており、調査地は嵯峨野方面から南東方向に流れる有栖川と、鳴滝方面から南東方向へ流れる御室川に挟まれた双ヶ岡地域の西部にあっている。この地域は、南西に向け緩やかに下る丘陵状の地形を呈している。その南端部付近、すなわち調査地北側では、北西から南東方向に10m近い落差をもつ段丘を形成している。調査地は、その段丘下から緩やかに南に傾斜している平坦地にあたる。

嵯峨野一帯の山麓や池畔は、先土器時代の遺跡が散在しており、菖蒲谷遺跡・広沢池遺跡・沢ノ池遺跡などがある。縄文時代では早期・前期の遺物が上ノ段町遺跡、中期の遺物が嵯峨院下層広沢池遺跡などから採取されている。

弥生時代から古墳時代前期になると和泉式部町遺跡、村ノ内町遺跡などから竪穴住居跡や土師器などが検出されている。古墳時代中期には和泉式部町遺跡や西ノ京遺跡などがある。また、中

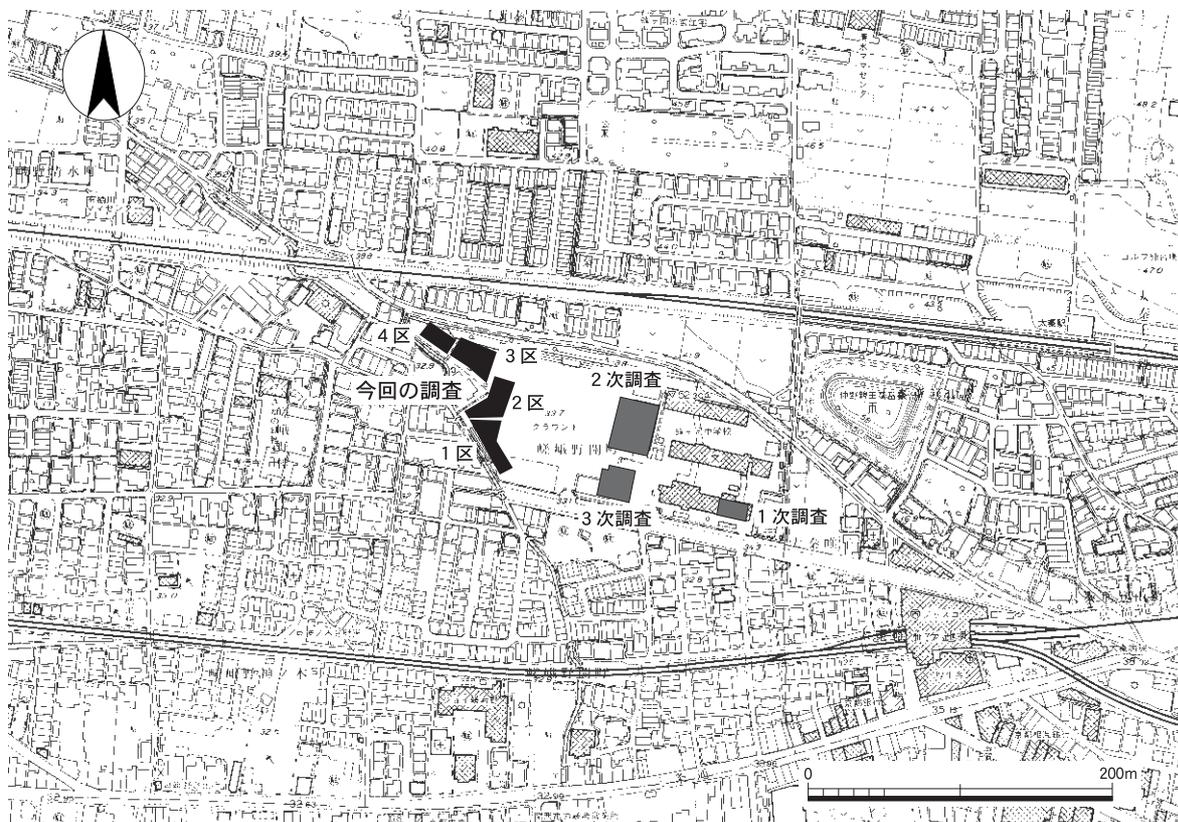


図2 調査区配置図(1:5,000)



図3 調査前全景（東から）



図4 調査風景（北から）

期以降になると仲野親王陵古墳や太秦馬塚古墳などの前方後円墳が造営されるようになる。6世紀後半代になると、平地部では異古墳や常盤東ノ町古墳群などが、また山麓部には山越古墳群、御堂ヶ池古墳群、音戸山古墳群、双ヶ岡古墳群などの群集墳がみられるようになる。集落跡としては常盤仲之町遺跡、西野町遺跡などがある。

平安時代になると別業の造営が多くなる。常盤の源常の山荘や双ヶ岡東麓の清原夏野の山荘、源融の棲霞観などが挙げられる。そして宇多天皇による御室仁和寺や御願寺である四円寺なども造られる。また、仲野親王や章子内親王等の皇族に関連する墓地も散在する。さらに、後期には70を越す仁和寺の子院が造営される。

鎌倉時代以降では、広隆寺・大覚寺など従来の信仰を続ける寺院があるなかで、嵯峨野方面を中心に浄土宗系の化野念仏寺などが信仰を集め、奥嵯峨は墓域となった。また、武家政権による影響下で妙心寺などの禅宗寺院が盛行する。

その後、室町時代後期には応仁の乱などで双ヶ岡、嵯峨野の全域が戦乱に巻き込まれ、その機能を喪失した。その後、江戸時代にいたって復興の兆しが見られるようになった。

3. 遺 構

遺構の総数は203基である。1区では主として近世の耕作跡を検出した。2区では平安時代の木棺墓を検出した。3区では包含層から縄文土器を、4区においては縄文土器包含層のほか飛鳥時代の溝などを検出した。以下に、各調査区ごとの概説を行う。

(1) 1区 (図版2・3・10)

検出した遺構は71基である。

第1面 (図版2・10)

耕作溝 近世以降の遺構では、耕作に伴う東西および南北の溝を多数検出した。溝には、耕作に際しての鋤跡と考えられるものが多数あり、牛の足跡も複数認められた。耕作溝の規模は幅0.2m前後で、深さは0.05mに満たないものが多い。

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構			
	1 区	2 区	3 区	4 区
縄文時代			遺物包含層	遺物包含層
飛鳥時代			溝 9 下層	溝22
平安時代	溝73	木棺墓54、土壇10、 溝11・13・45	土壇 2、溝18	溝31
中・近世	溝64・72	土壇 8・12・15、 溝 1・27	土壇17、落込15、 溝 9 上層・20	落込23、溝21・30

溝64 耕作溝の一つである。長さ6.5mを検出している。幅は0.2m前後で、深さは0.05mである。溝からは「狩野元信³⁾」銘の石印が出土している。

溝72 調査区の北東部で検出した。規模は幅0.8m、深さ0.3mである。方位は北に対して西に約45度振れる。耕作地への導水施設であろう。この溝からの出土遺物はないが、2区でつながっている溝1で近世の遺物が出土している。

第2面（図版3・10）

溝73 溝72の下層に重複して検出したが、2区では西に湾曲し別遺構（溝45）となったため、溝73とした。長さ11.3mを検出した。幅は1.0m前後で、深さは0.6mを測る。遺物は出土していないが、過去3回の調査地での平安時代の溝の埋土と同様の土色などからして平安時代まで遡る可能性もある。

この溝以外には顕著な遺構が認められず、当時であっても耕作地などであった可能性が高く、また、遺構が存在していたとしても近世の耕作により削平されたものと考えられる。

（2）2区（図版4・5・10）

検出した遺構は66基である。

第1面（図版4・10）

調査区の北東部については耕作の痕跡はほとんどなく、地山面まで暗褐色の堆積土が厚く積もっている。当地区は近代の土地利用地図⁴⁾を見ると竹藪であったことがわかる。南西部分については1区と同様に近世の耕作の跡を検出した。

土壇 8・12・15 土壇はいずれも直径1.0m前後のほぼ円形で、深さは0.3m前後である。遺物は近世の土師器小片と混入と思われる緑釉陶器小片がある。遺構の性格は不明である。

溝 1 調査区の北東部と南西部には段差があり、その段差に沿って南東方向に流れる溝である。長さ11.5mほど検出した。幅は北側で1.8m、南側では2.8mである。深さは南側肩部から0.5m、北側肩部からは約1.0mである。遺物は上層ではガラス片も含まれ、学校グラウンド造成時期頃まで機能していたと推定できる。

溝27 1区第1面の溝72の延長部分である。また、溝1の支流でもある。溝1に直行して南西

に8.0m流れ、さらに左に直角に折れ1区の溝72につながる。幅は0.7m前後で、深さは0.4mである。出土遺物には土師器と施釉陶器の小片がある。

第2面(図版5・10)

溝45 1区の溝73の延長部分にあたる。2区で北西方向に湾曲する。直線距離で9.2mを検出した。幅は1.0m前後で、深さは0.6mである。遺物は土師器小片が出土している。

溝11 調査区北側で検出した。幅は1.0~1.5m、深さは0.2mで、長さ8.8mを検出した。1995年度の3次調査で検出した平安時代とされている溝と同じ方向であり、同一溝と思われる。

土壇10 調査区北西隅で検出した。北側は調査区外に延びる。幅は広いところで2.0mあり、深さは最深部で0.8mある。長さは3.5mを検出した。遺構の性格は不明である。

溝13 後述の落込16を切って、北西方向から南東方向に延びる不整形な溝である。長さ13.0m以上で、幅は広いところで3.0m前後、狭いところで1.0mである。深さは0.4m前後である。遺物は出土していないが、落込16の最終的な埋土の可能性が高く、第2面として扱った。

落込16 東西方向に広がる落込みである。南北幅10.0m前後で、東西9.0m以上ある。深さは最深部で1.0mになる。黄褐色粘質土層とその下に黒褐色粘質土層が堆積する。遺物は出土していないが、3・4区で検出した縄文土器包含層と近似の堆積層である。

木棺墓54(図版9・12・13、図5) 調査区の北東隅で検出したが、調査区外へ広がるため拡張して全形を確認した。検出面の規模は、南北3.0m、東西1.6mの長方形である。掘形の主軸は北に対して東へ約40度振れる。

検出面から約0.8m下層で、南北1.9m、東西0.5mの細長い長方形を示す土質の違う輪郭線を検出した。この輪郭線上で一定間隔・同一の高さで鉄釘の一群が認められた。鉄釘は棺蓋を打ち付けたものと考えられる。

木棺の輪郭を検出した面から約0.2m下位で、木棺墓の底面と考えられる木炭を敷きつめた面を検出した。底面でも木棺輪郭に沿って釘先が上を向いた状態や木棺側板に直交した方向で、鉄釘が一定間隔・同一の高さで検出でき、木棺の規模を確定することができた。木棺の検出面での規模は、長さ1.9m、幅0.5mある。高さは不明だが、上・下面で検出した鉄釘間の高低差は0.2mある。墓壇底全体に木炭を敷きつめた後、木棺を納めたものである。

鉄釘は上部で13本、下部で15本出土した。上部で使用された釘は、出土位置の間隔から本来14本と推定される。同様に、下部については16本と推定される。また、板材の厚みについては、鉄釘に付着している部材の長さなどから蓋および底板が2.5cm、側板は3.0cmと推定される。

木棺内底面には副葬品が遺存しており、北西隅には立った状態の須恵器壺、隣接して緑釉陶器椀、その上に緑釉陶器皿・土師器皿が蓋をしたような状態で出土した。土師器皿は棺の中央東側にも裏返った状態で出土している。また、北東隅には鉄製刀子が2本ある。どちらも、峰を東に向けて、刃先を南に向けている。なお、人骨は遺存していない。

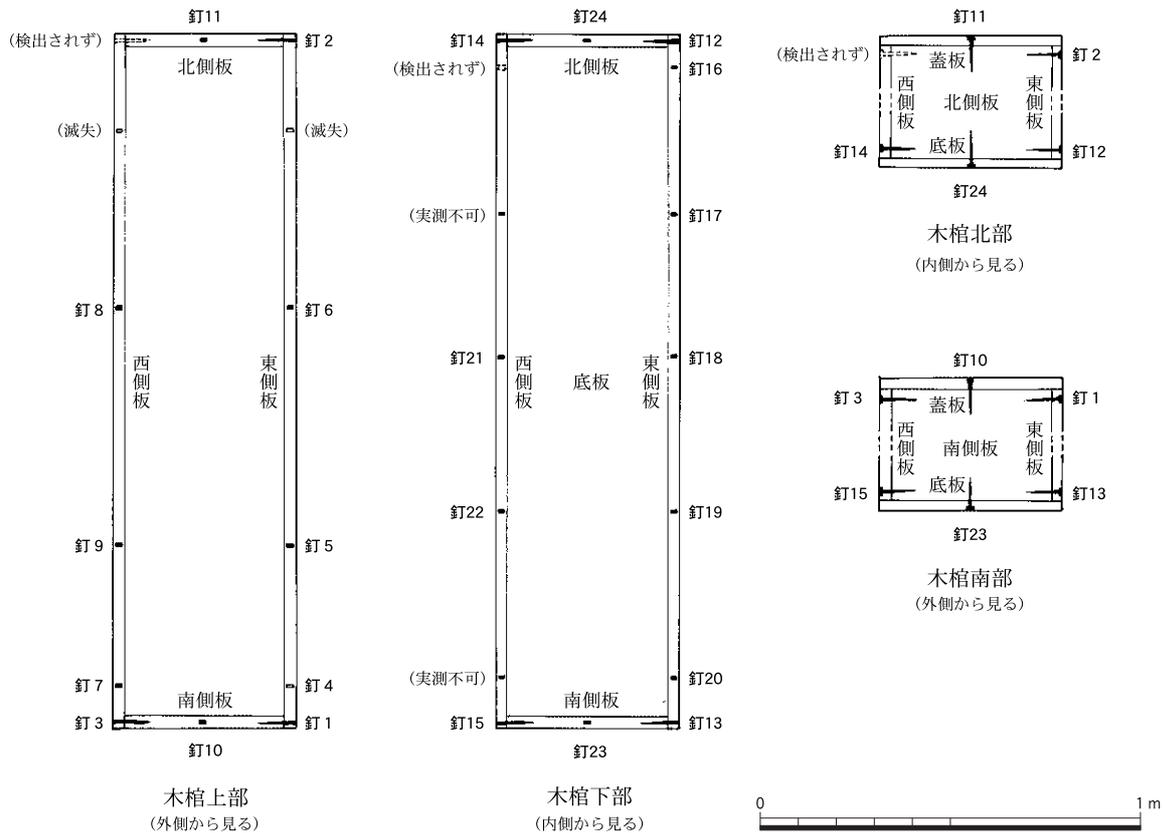


図5 2区木棺墓54木棺模式図(1:20)

(3) 3区(図版6・7・11)

調査は2区で検出した木棺墓に関連する遺構の検出にも留意した。遺構は27基を検出した。

第1面(図版6・11)

第1面では中・近世の遺構を検出した。調査区は、北側の傾斜地に近くなるにしたがって自然堆積土が厚くなり、南に傾斜している。それに対応してグラウンド造成時の埋め立ても浅くなっている。傾斜地のためか、遺構は少ない。

落込15 傾斜地裾部から南は緩く傾斜する面となっているが、調査区南側では南への傾斜地、落込15を形成している。遺物は出土していないが、堆積した層序から判断して中・近世と思われる。

土壌17 東西0.8m、南北0.3m以上の不定形な土壌である。出土遺物はなく性格も不明である。

溝20 調査区の南東部で円弧状に延びる溝を検出した。幅は0.3m、深さ0.05mで、長さ約7.0m検出した。出土遺物は瓦質土器の小片があるが、時期などは不明である。

第2面(図版7・11)

溝9下層 傾斜地の裾に沿って南東に流れる流路。幅1.2m、深さ0.1mを測る。なお、上層部分については機械掘削時に削平しており、断面調査とせざるを得なかった。この溝からは、遺物は出土していない。

溝18 2区の溝11の延長部分である。トレンチ東端から3.0m付近で途切れている。第1面の

落込15の東端に近く、この付近から北は平坦面にかわることから、溝18はこの付近が起点と思われる。

土壙2 2区の土壙10の延長部分である。南東方向に約1.8m検出した。出土遺物はなく、遺構の性格も不明である。

縄文土器包含層 傾斜地の裾部分を南北7.0m（東側は12.0m）東西28.0m以上の落ち込み部分に堆積した土層である。包含層は黄褐色粘質土層とその下の黒褐色粘質土層、それに北側傾斜地に近い地山直上のみ堆積する暗褐色砂礫層からなる。包含層は中央部分が厚く、1.2mになるところもある。遺物は、調査区の西端に集中し、黒褐色粘質土層からの出土が最も多い。

(4) 4区 (図版8・11)

検出した遺構は39基である。

3区で検出した縄文土器包含層の延長部分の調査に主眼をおいた。ただし、3区よりも傾斜地が迫り、縄文土器包含層を含む自然堆積土層の検出面が一層浅くなることを想定して、重機掘削は新旧グラウンド造成時の盛土層の除去のみに留めた。

第1面 (図版8・11)

溝21 調査区中央を傾斜地に沿って北西から南東方向に延びる溝である。3区の溝9上層に該当すると考えられる。幅1.3m、深さ0.2mである。出土遺物には土師器の小片がある。

落込23 調査区南端に沿って南西方向に落ち込む傾斜地である。東端で幅2.0mを測る。出土遺物には緑釉陶器椀があるが、層序からみて混入と思われる。3区の落込15と同様の遺構である。

溝30 調査区の北西隅で検出した南東方向へ流れる溝である。規模は幅0.7m、深さ0.3mで、長さ4.3mを検出した。出土遺物には土師器小片がある。

第2面 (図版8・11)

土壙10 調査区の西端で検出した。東西1.5m以上、南北1.5m、深さ1.2mを測る不定形な挿鉢状の土壙である。遺物は出土していない。

溝22 3区の溝9下層と同一方向であり、規模も近似しており、同一の溝と判断した。溝21との関係は、4区では溝22が南に隣接しており、切り合い関係からも新旧の関係であるが、東に寄るにしたがって重複部分が広がり、3区東壁付近では完全に重複する。すなわち、3区溝9の上層としていたものは4区第1面の溝21であり、下層としていたものは4区第2面の溝22に対応すると考えた。この溝からは7世紀後半代に相当する土師器が出土している。

溝31 第1面で検出した溝30の下に同一方向で流れる溝である。幅0.6m、深さ0.5mである。南東方向に約4.0m検出した。出土遺物には土師器の小片があるが時期は不明である。

縄文土器包含層 3区の包含層と同じく黄褐色粘質土層とその下の黒褐色粘質土層が認められた。北西部の一部を除いて調査区全域に及ぶ。縄文土器は黒褐色粘質土層からのみ出土している。小破片が十数点ある。3区で出土した条痕文を施す土器と同様なものである。

4. 遺物

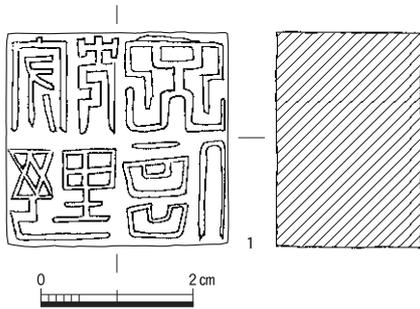


図6 1区溝64出土石印実測図(1:1)

遺物総数はコンテナ20箱である。出土した主な遺物としては1区の「狩野元信」銘の石印、2区では木棺墓に伴う遺物、3区の縄文土器、4区の飛鳥時代の土師器などがある。以下に、各地区ごとの遺物の概略を述べる。

(1) 1区(図6・7)

この調査区での出土量はごく少量である。出土した

遺物は近世以降のもののみである。

近世

土器類 肥前磁器や京焼の椀などがある。いずれも小片でごく少量である。

石製品(図6・7) 篆書で「狩野元信」銘の石印(1)がある。近世の耕作溝(溝64)から出土した。石材は葉鐵石⁵⁾である。



図7 1区溝64出土石印

表2 遺物概要表

	時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
1区	近世	土師器・施釉陶器・瓦	3箱	石印1点	0箱	3箱
2区	平安時代	土師器・須恵器 緑釉陶器・金属製品	3箱	土師器2点、須恵器1点、緑釉陶器2点、鉄釘24点、刀子2点	0箱	1箱
	近世		5箱		0箱	5箱
3区	縄文時代	縄文土器・石製品	2箱	縄文土器13点、石器2点	1箱	0箱
	近世	土師器・施釉陶器・焼締陶器・瓦	1箱		0箱	1箱
4区	縄文時代	縄文土器・石製品	1箱		1箱	0箱
	飛鳥時代～平安時代	土師器・土製品・緑釉陶器	1箱	土師器2点、土錘1点、緑釉陶器1点	0箱	0箱
	近世	土師器・施釉陶器・焼締陶器・磁器・染付・瓦	4箱		0箱	4箱
	合計		20箱	51点(4箱)	2箱	14箱

(2) 2区 (図版14・15、図8・9)

この調査区で出土した遺物は平安時代のもの以外は少ない。近世から現代にかけての土器類は、小破片である。

平安時代

土器類 (図版15、図8 - 2 ~ 6) 平安時代の土器は、木棺墓54に伴う一括資料がある。緑釉陶器段皿・椀、須恵器壺、土師器皿がある。

緑釉陶器段皿 (2) は、口径14.8cm、器高2.8cmを測る。貼り付け高台で、内面の見込みには沈線を巡らす。全面に施釉する。東濃産と思われる。緑釉陶器椀 (3) は、口径17.8cm、器高6.4cmである。高台はケズリ出しの輪高台で、ミガキの後全面に施釉する。篠産と思われる。須恵器壺 (4) は、口縁部は歪んでおり、底部は糸切りで未調整である。土師器皿 (5) は、口径は14.8cm、器高1.6cmである。器壁は薄く、口縁は外反し、屈曲する。木棺中央部から出土した土師器皿 (6) は、口径は15.6cm、器高2.2cmである。土師器皿 (5) と近似の特徴をもつ。これらの土器類は、10世紀初頭と想定できる。

刀子 (図版15、図8 - 7・8) 刀子 (7) は欠損しており、柄の部分が残存する。残存長は6.4cm、幅は1.3cmである。刀子 (8) は柄の一部が欠けている。残存長は23.2cm、幅2.0cmで、各所に漆の塗膜が認められる。

鉄釘 (図版14、図9 - 釘1~24) 出土している釘は、すべて木棺墓に伴うものである。上部で出土したもの (釘1~11) と下部で出土したもの (釘12~24) に分かれる。上部の鉄釘は、図化できなかったものも含めて13本ある。下部の鉄釘は、図化できなかったものも含めて15本ある。

釘の寸法については、先端部が欠損しているものが大半であり、その他のものは錆と板片が付着しており、現段階では現存の寸法しか判明していない。現存しているものでは11.2cmものが最長である。釘は大きく分けて、10.2cm (概ね3.4寸) と11.2cm (概ね3.7寸) の2種類ある。前者は横方向に打つ釘 (釘1~3・12~15) に、後者は縦方向に打つ釘 (釘4~11・16~24) に使用している。

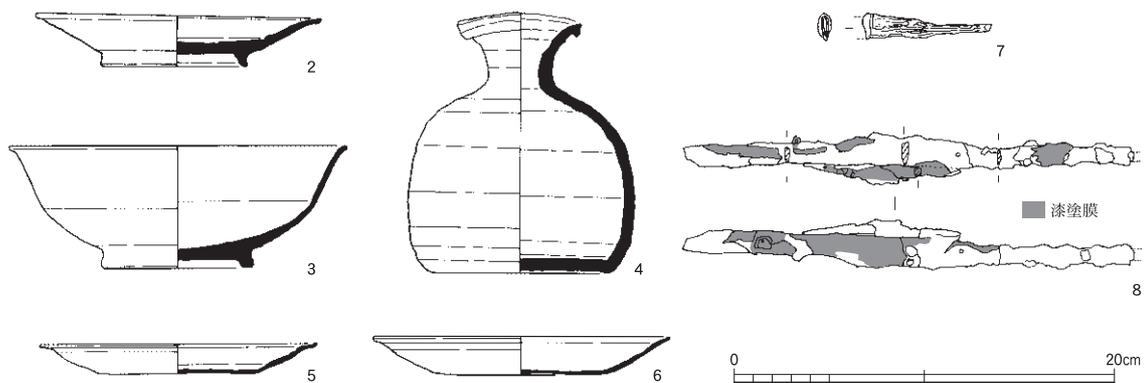


図8 2区木棺墓54出土遺物実測図 (1:4)

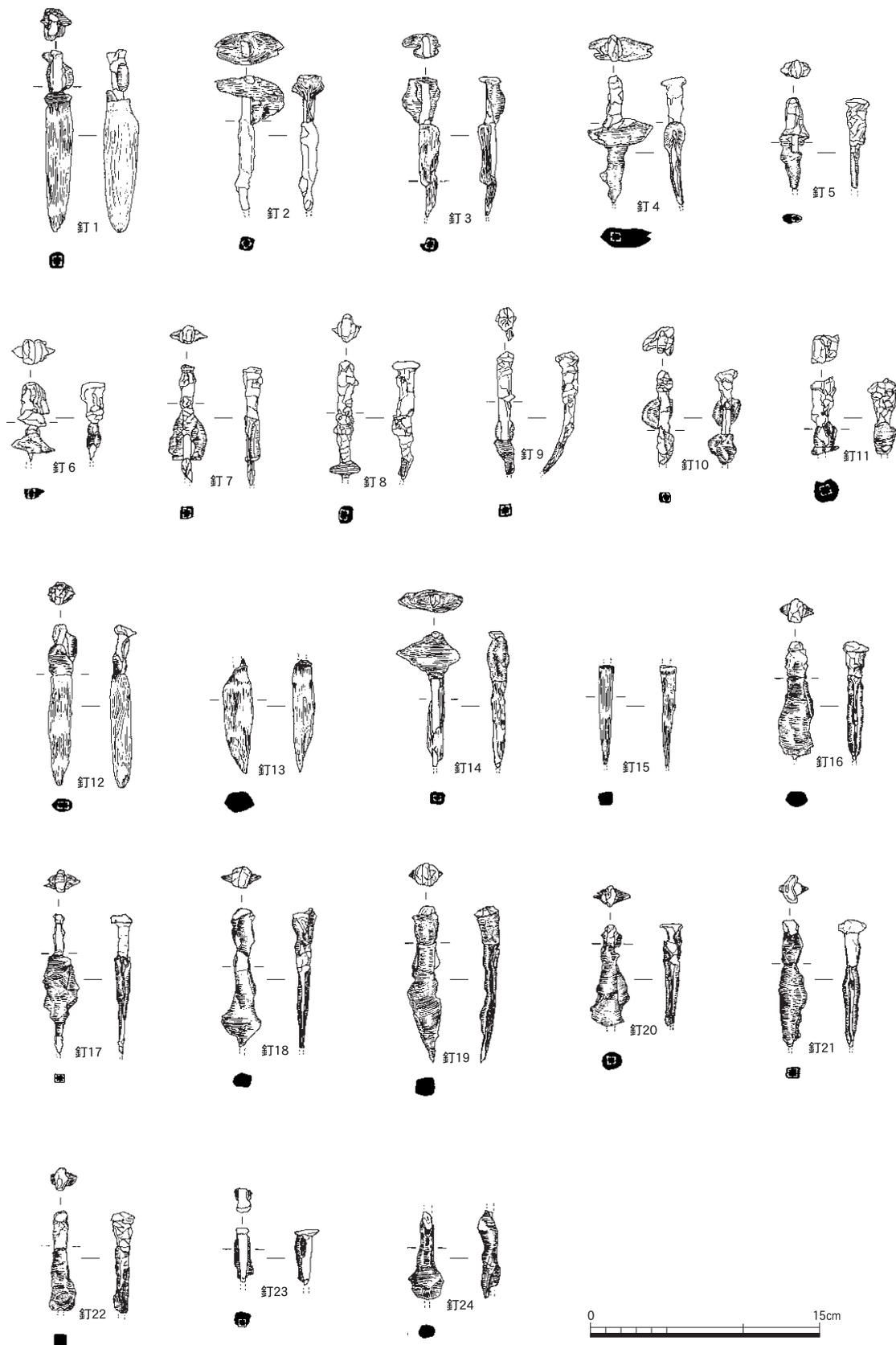


图9 2区木棺墓54出土铁钉实测图(1:4)

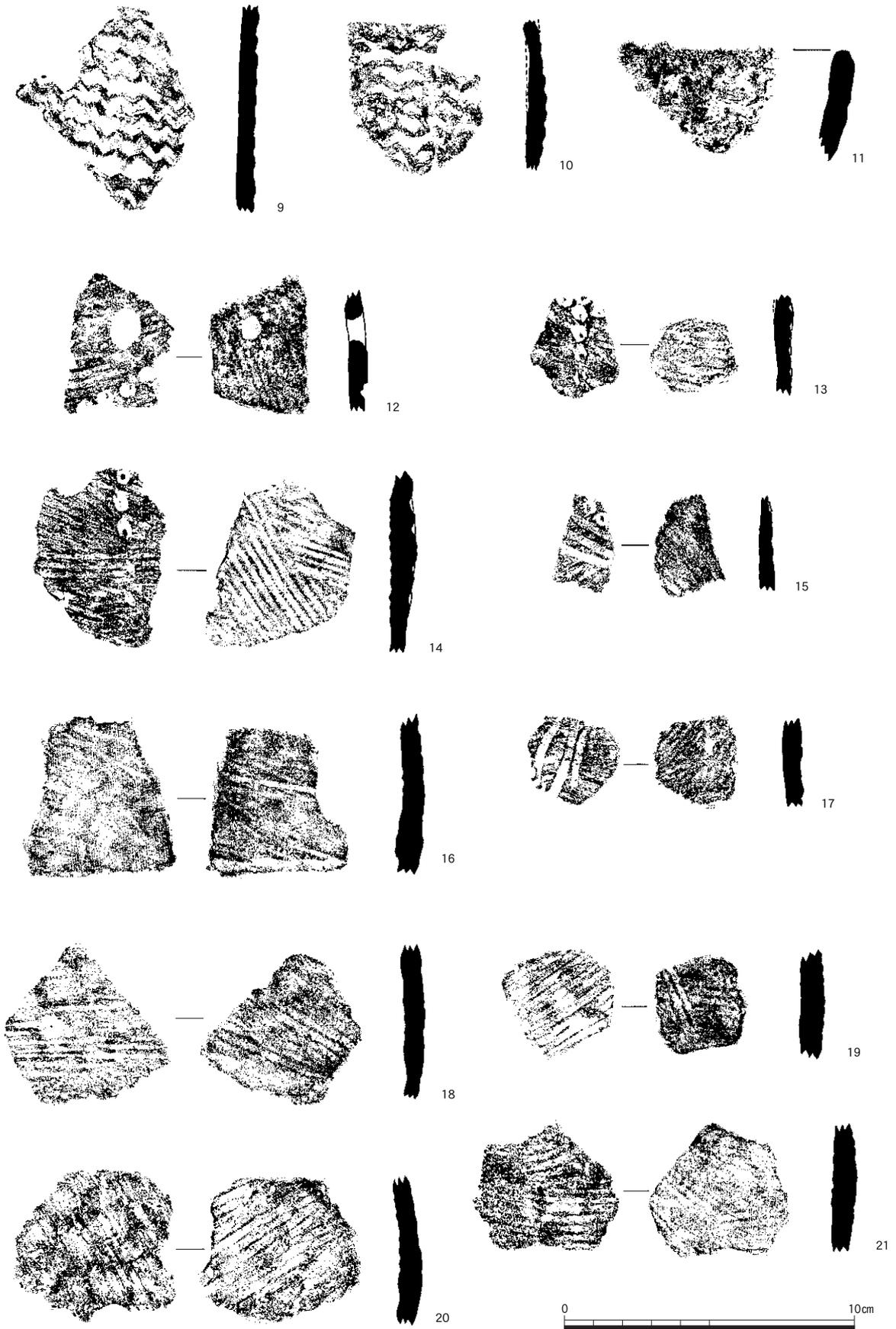


图10 3区出土縄文土器拓影・実測図(1:2)

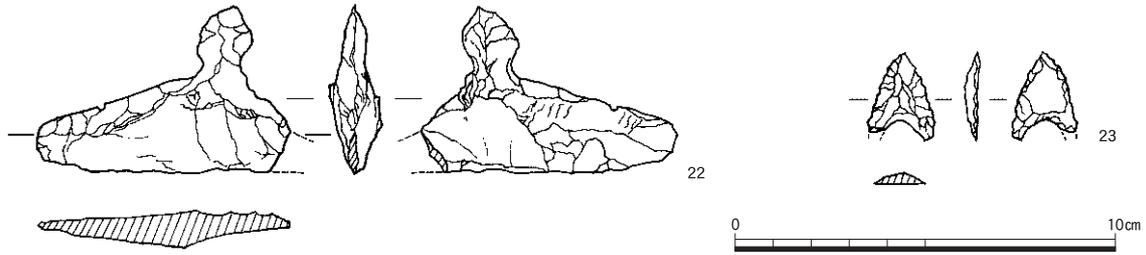


図11 3区出土石器実測図(1:2)

(3) 3区(図版15・16、図10・11)

この調査区では縄文土器の出土が特筆できる。それ以外では古墳時代の須恵器、近世の瓦質土器、土師器、陶磁器があるが、いずれも小破片である。

縄文時代

土器類(図版16、図10-9~21) 早期から前期の土器群である。

押型文の深鉢と思われる破片は2点(9・10)あり、包含層のうち砂礫層より出土したものである。山形文で胎土に角閃石がまじるものである。北白川廃寺下層遺跡に対応し、早期前半に属する。

また、鉢の口縁部を含む破片が1点(11)ある。磨滅が激しいが、楕円の押型文が施されたものである。包含層の内、黒褐色粘質土層の底部に近い地点から出土した。

また、竹管文と条痕文を組み合わせた土器片(12~21)がある。包含層の黄褐色および黒褐色粘質土より出土した。一乗寺向畑遺跡南地点下層においても類似の土器が採集されている。早期末から前期初頭に相当する遺物群である⁶⁾。

石製品(図版15、図11-22・23) 石匙(22)は、石材はサヌカイトで、横に長いタイプである。類似のものは1980年の1次調査でも出土している。

石鏃(23)は、黒褐色粘質土より出土した。石材はサヌカイトである。

(4) 4区(図12)

3区と同じく縄文土器が出土している。また、飛鳥時代の土師器杯などが溝22から出土している。落込23からは緑釉陶器椀が出土している。それ以外には土師器、施釉陶器、染付、焼締陶器、瓦など、近世から現代のものがある。いずれも小破片である。

平安時代

土器類(図12-24) 緑釉陶器椀(24)は落込23から出土した。口径は19.6cm、器高7.2cmを測る。ケズリ出し高台で、ミガキの後全面に施釉している。9世紀後半代のものである。混入と思われる。

飛鳥時代

土器類(図12-25・26) 溝22から出土した。土師器杯(25)は、外面は磨滅が激しく調整痕

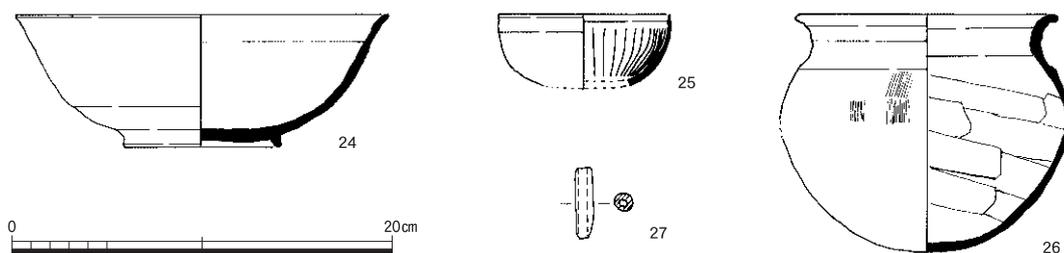


図12 4区落込23・溝22出土遺物実測図（1：4）

は不明であるが、内面には暗文が認められる。7世紀後半代にかけてのものである。土師器甕（26）は内面に荒いケズリを施し、外面頸部をナデ調整する。外面のハケメは磨耗によりわずかしが認められない。

土製品（図12 - 27）管状の土錘（27）が溝22から出土した。

5.まとめ

今回の調査で明らかになったことを概説すると次のとおりである。

（1）調査地の土地利用について

当初、想定されていた古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物などは検出されなかった。調査地一帯は、近世の耕作によって削平されたのか、集落からはずれていたのか不明である。ただ、今回の調査地北半部は、傾斜地の裾に沿っており、農耕用の導水路の水源地に近く、少しずつ位置が移動するが現在まで水路が存在する。一方、南半部は農耕地もしくは自然の荒地が想定できる。

（2）木棺墓について

嵯峨野・太秦地域における木棺墓の検出は、今回が初例である。発掘調査が進んでいる平安京内やその近郊においても平安時代の木棺墓の検出例は数例（西野山古墓・安祥寺下寺跡⁷⁾・平安京右京一条四坊四町跡⁸⁾・右京三条三坊十町跡⁹⁾・右京五条二坊五町跡¹⁰⁾など）に過ぎない。今回検出した木棺墓は、これまで検出されたものと同様の規模を有する。また、墓壙の深さは検出面から約1mに達し、最も深い資料になった。検出例が少なく不明な点の多い平安時代の墓制・葬送儀礼の解明において重要な資料であると考えられる。

蜂ヶ岡中学校の過去3回の発掘調査のうち、1995年度の3次調査で平安時代中期の建物跡（2間×3間以上）が溝とともに検出されており、遺物も緑釉陶器などが出土している。同一地域であることから、今回の木棺墓との関連が窺われる。また、調査地の蜂ヶ岡中学校北東隣接地には貞観9年（867）に没したとされている桓武天皇の皇子仲野親王陵がある。王陵の比定地は五世紀代の垂箕山古墳であるが、葛野地域に存在するとされている仲野親王陵との関連も被葬者が高位の貴族であると思われることから注目される。

(3) 縄文土器について

1980年の1次調査でも縄文時代早期から前期の土器が出土したと報告されている。今回早期前半、早期末から前期初頭の遺物が出土した。今まで左京区北白川や一乗寺などでの出土にほとんど限定されていたこの時期のものが、右京区のこの付近でも確認されたことは大きな成果であった。今後、この近辺でより確実な、生活跡等の発見が期待される。

註

- 1) 1次調査 中村 敦「附章13 上ノ段町遺跡」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1997
- 2次調査 平田 泰・小檜山一良「上ノ段町遺跡」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1993
- 3次調査 長戸満男「上ノ段町遺跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1997
- 2) 加納敬二・小檜山一良・平田 泰『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1997
- 3) 狩野元信(かのうもとのおぶ)、文明8年(1476)~永禄2年(1559)、室町時代後期の狩野派の絵師。
- 4) 西村睦雄・藤岡謙二郎『北白川と嵯峨野』 地人書房 1968
- 5) 李永一氏(日本地学研究会会員)より御教示を得た。
- 6) 泉 拓良氏(奈良大学教授)、矢野健一氏(立命館大学助教授)の御教示を得た。
- 7) 高正 龍・平方幸雄「安祥寺下寺跡1」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996
- 8) 長戸満男ほか「平安宮左馬寮 - 朝堂院跡・平安京右京一・二条二~四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1999
- 9) 平尾政幸『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1990
- 10) 堀内明博「平安京右京五条二坊」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみのだんまちいせき							
書名	上ノ段町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-2							
編集者名	津々池惣一・太田吉男							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみのだんまちいせき 上ノ段町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さかのひらきちょう 嵯峨野開町	26100	910	35度 00分 48秒	135度 41分 59秒	1期調査 2002年12月 13日～2003 年3月31日 2期調査 2003年4月 1日～2003 年7月7日	600㎡ 600㎡	公共下水道 敷設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上ノ段町遺跡	集落跡	縄文時代	包含層	縄文土器		早期の押型文土器		
		平安時代	木棺墓	土師器・須恵器・ 緑釉陶器		平安時代中期初頭 の一括遺物		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-2

上ノ段町遺跡

発行日 2003年9月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961